



筑紫女学園大学リポジト

燕趙悲歌士覚書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松崎, 治之, MATSUZAKI, Haruyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/683

体的に描かれていて、詳しい。

参考資料

- 1、本稿を草するにあたって、『詩經』召南の甘棠篇については、漢文大系十二『毛詩』卷一・召南の甘棠（富山房）のそれを資料として、引用し、参照。
- 2、戦国時代の燕の歴史については、漢籍国字解全書第二十五卷（早稲田大学出版部）の『戦国策』国字解下・燕上・下及び新釈漢文大系85（明治書院・吉田賢抗著）『史記』五・世家上・「燕召公世家」第四と漢文大系六（富山房）史記列伝上・史記評林卷之八十「楽毅列伝」第二十、同じく、史記評林卷八十六・「刺客列伝」第二十六などを参照。
- 3、韓愈の「董邵南ヲ送ルノ序」については、新釈漢文大系70（明治書院・星川清孝著）「唐宋八大家読本」一・卷四と、新釈漢文大系18（明治書院・前野直彬著）「文章軌範」（正篇）下・卷五のそれとを参照。

註

- 1、伍子胥||春秋時代の楚の人。名は員、字は子胥。父も兄も楚の平王に殺されたので、呉に逃げ、呉王を助けて楚を討ち、平王の墓をあばいて死体にむちうち復讐した。のち越を討とうとしたが、呉王夫差が越の賄賂を受け、子胥を自殺させた。
- 2、呉王闔閭||紀元前五一五年―前四九六年在位。春秋時代の呉の王。名は光。夫差の父。楚を破って威をふるったが、越王勾踐と戦い、負傷して死んだ。
- 3、薊丘||薊邱・薊門。今の北京市の近くの地。戦国時代、燕の都があったところ。
- 4、廬居士藏用||居士は官に仕えない人のこと。のちに廬藏用は、陳子昂の遺文を集め、それに序と詳しい伝記を付している。『陳氏別伝』が、それである。
- 5、碣石坂||薊丘の東南、今の北京市大興県にある丘。燕の昭王はここに碣石館を築き、大学者鄒衍を住まわせ、教えを受けた。
- 6、黄金臺||碣石坂付近にある台。燕の昭王は、この台の中に千金をおいて賢者を集めたという。
- 7、昭王||戦国時代の燕の王(紀元前三一一年―前二七九年在位) 昭王は、斉を破るため、郭隗に賢者を推薦してくれと頼んだところ、「先ズ隗ヨリ始メヨ」と、言われた話は有名。隗を優遇したため、楽毅、鄒衍などの有能な人々が集まり、ついに斉を破った。
- 8、幽州臺||幽州は、現在の北京市のあたりを指す。台は、薊丘にあるものと思われる。廬藏用の『陳氏別伝』では「薊北の楼」と、いう。
- 9、燕丹||戦国時代の燕の国の太子、丹のこと。燕王喜の息子。丹は幼いころ趙の国の人質となっていたが、その地で、政(のちの秦の始皇帝)と仲よく遊んだ。ところが政が秦王になると、丹は秦の人質となった。秦王は、丹が幼なじみであるにもかかわらず、よい待遇をしなかった。そこで丹は怨みを抱いて逃げ帰り、秦王の暗殺を荊軻に託した。話は『戦国策』や、『史記』の刺客列伝に詳しく記載してある。
- 10、董邵南||唐の時代の人。生没年不明。貧苦の生活の中で学問にはげみ、また親孝行をした。韓愈は「紆呼董生行」という詩を賦してその人がらをたたえている。
- 11、河北の節度使||当時(中唐・晩唐)の、河北・山東などの節度使の実情については、唐代伝奇『紅綫傳』(袁郊撰)に具

に対して、孔明の衷心よりの臣従が、楽毅の場合と同様、人々の心を魅了するものであろうか。

燕の昭王と楽毅、蜀の劉備と孔明、あるいは、楽毅の恵王に対する返書に対して、孔明の劉禅に奉じた『出師の表』と、いったパターンは、同じ行動様式であるが、それがいずれも人々の琴線にふれるものとして、賛嘆されている。

これも普遍的な伝承であるが、中国は歴代危急存亡の秋には、必ず屈原の詩が、憂国の心を吐露したものととして、緝かれたというが、これは、中国人の心をささえ、奮起させる魔力みたいな効用をもつものであつたのだろう。

「燕趙悲歌士」と「屈原」とは、いずれも、戦国時代に、辺境の地にあり、君臣関係のあつれきによって、破局にいたつた悲愴譚のヒーローである。

具体的には、燕王（恵王）に疑われ忌避されて、趙に出奔し、やっと生を全うした楽毅と、楚国のことを思いながらも、楚王に信任されなくて、憂いのはてに自殺した屈原の生きざまは、その結末は対照的であるが、ただ、いずれも自己主張が旺盛で、妥協がない点と、側近の中傷を真に受けて、かれらを遠ざける燕王と楚王の愚劣さかげんは、全く軌を一にするものである。

したがって、楽毅と屈原の文と詩が、時の流れの中で、「慷慨悲歌士」のイメージをつくりあげていったことは確かである。

なかんずく、燕趙の地は、悲歌士を生みだす荒涼たる地理的条件と、それにとまなう精神風土をそなえていたがために、おのずと、慷慨の気風を醸し出していったものであろう。

平成十一年十月十九日・脱稿

心を忘れなかつたと、いう。

そして、もしそういう不遇な人がいたら、今（徳宗・憲宗の時代）は、燕の時代とは違って明君が、朝廷で政治をとっているのだから、地方に埋もれずに朝廷に出てきてほしいと、いうのである。

この二つの例によって、中央政府を捨てて河北に行ってしまうという董邵南に、そうすべきでないと、暗示していることは明らかである。このように、意図するものを短絡的に表現せずに、むしろ裏面から悟らせようとしているところが、巧妙である。経世済民をモットーとし、君臣関係を重んずる儒者の権化ごんげみたいな韓愈の見事な論法といえよう。

戦国時代と唐代という時代の相違と、それも乱世の戦国期と、全盛期から衰亡期に入ったとはいうものの、現実には聖主賢君がまだ、在世中の唐王朝だという信条にもとづいての、韓愈一流のドグマは、燕趙悲歌士を客観化して、現在、燕趙の地は、「義ヲ慕ヒ仁ヲ彊ムル者」と、いった正統な悲歌士をはぐくむ土壌ではなく、節度使の跳梁跋扈によって、かえって、中央政府軽視の走狗養成の場となっているという判断によるものである。

初唐の陳子昂、駱賓王には、燕趙悲歌士との一体感が顕著であるが、中唐韓愈の場合は、燕趙悲歌士への尊敬の気持はあるものの、一体感という高揚はなく、中央政府の政治体制を遵奉する精神が旺盛で、儒者らしい視座で一貫している。

さて、こうした「燕趙悲歌士」に対するイメージは、その時代が衰亡したり、危急存亡の秋あきに、必ず思い出され、より膨らふくらまされて話題になっていったものようである。陳子昂・駱賓王・韓愈といった詩文家のそれに対する視座の違いはあっても、そのさい燕の昭王の賢者招聘しょうへいの故事は、よほど人々に感動を与えるものであったのか、それが、話柄の基軸になっている。

ちなみに、『三国志演義』で、諸葛孔明の人氣が抜群であるのも、劉備が三顧の礼をもって、孔明を招請したこと

ある。あわせて、現在（中唐）の河北の地には、不忠の家臣のいることを暗に風刺したものである。

中唐という韓愈の時代の政治制度の弊害は、節度使（地方長官）の跋扈ばつこであった。特に権限の乱用は、めにあまるものがあつた。ところが、中央政府の役人の道をとぎされた者は、こうした節度使をたよつて、職を得、生計を立てる道をえらぶ者が多かつた。韓愈自身、一時その生活を送っている。その中で、河北（燕の地）の節度使は、一小独立国のような権力を持っており、朝廷にそむくことも、しばしばであつた。

今また董邵南も、そうしたところに出かけようとしているわけである。だとすれば、韓愈の老婆心は深刻なもので、董邵南の河北行に対しては、明らかに批判の意味がこめられているよう。

とにかく、四段落による文の運びは、あざやかである。『孫子』九地篇の「始メハ処女ノ如ク、後ハ脱兎ノ如シ」という名言を地で行く、文章作法と思われる。

科擧の試験に落ちて、都に仕えることをあきらめ、不満をいだいて、地方に行こうとする董邵南を、なぐさめることからアプローチしている。

具現すると、かつての燕趙の国、現在の河北（北京地方）に行けば、きみの満たされぬ心に共鳴し、意気投合する人がたくさんいることだろうと、実におだやかな導入である。

「董生勉メヨヤ」と、いうことばで、失意の董邵南をなぐさめ、力づけている。

そのあとで、燕は昔の燕ならずで、現在では、「義ヲ慕ヒ仁ヲ彊ムル」と、いった風俗は変わってしまったかもしれない、いいながら、行ってみないとわからないともいう。

そして、第四段落で、全体の結論をのべるわけである。

まず、「感慨悲歌の士」を受けて、「望諸君」（燕の樂毅）を登場させて、かれは疑われても忠誠を忘れなかつたと、いう。また、「義ヲ慕ヒ仁ヲ彊ムル者」を受けて、「屠狗者」（高漸離）を引き出し、不遇な身であっても仁義の

最後に、『唐宋八家文読本』巻四、『文章軌範』巻五、所収の中唐・韓愈（七六八―八二四）の『董邵南ヲ送ルノ序』に見える「燕趙感慨悲歌士」に対する当時の概念について、ふれておこう。

(一) 燕・趙ハ古感慨悲歌ノ士多シト称ス。董生進士ニ擧ゲラレシモ、連ニ志ヲ有司ニ得ズ。利器ヲ懷抱シ、鬱鬱トシテ茲ノ土ニ適カントス。吾其ノ必ズ合フ有ランコトヲ知ルナリ。董生勉メヨヤ。

董生は科擧の試験に失敗して、落ちこみ、河北に行こうとしているが、そこは昔から感慨悲歌士が多く、つまり、現在の董生と同じ心境の人が多くいるところだから、恐らく気持がうまくあうだろう。

(二) 夫レ子ノ時ニ遇ハザルヲ以テ、苟モ義ヲ慕ヒ仁ヲ彊ムル者、皆愛惜ス。矧ンヤ燕・趙ノ士、其ノ性ニ出ズル者ヲヤ。

河北には、董邵南と意気の合う人が多い理由をのべている。

(三) 然レドモ吾嘗テ聞ケリ、風俗ハ化ト与ニ移易スト。吾惡ンゾ其ノ今ノ古ノ云フ所ニ異ナラザルヲ知ランヤ。聊カ吾子ノ行ヲ以テ之ヲトセン。董生勉メヨヤ。

風俗というものは、国家の教化方針によって、変わるものだから、あるいは現在では意気の合う人は少ないかもしれない。それも行って見ないとわからないということ。

(四) 吾子ニ因リテ感ズル所有リ。我が為ニ望諸君ノ墓ヲ弔シ、而シテ其ノ市ヲ觀ヨ。復タ昔時ノ屠狗者有ランカ、我が為ニ謝シテ曰へ、『明天子上ニ在リ、以テ出デテ仕フ可シ』ト。

一時の不遇にくじけず、君主への忠節を忘れない人も世間には多いものだ。現在は明君が中央にいるのだから、地方に行く必要はないと、いう。

以上四段落の文章の主旨は、現在の朝廷を見捨てて河北の地方官になってしまおうとする董邵南をいさめた文で

荊軻は車に乗って去り、最後までふりかえらなかつた。『史記』刺客列伝第二十六には、送別の情景を、そのように記している。

こうした、ほぼ九百年前の故事を思い浮かべながら、今、人を送る駱賓王の心は厳肅そのものであった。もうあとには引けないといった絶体絶命の決意であつたらう。送られる人は徐敬業であるという説もある。

光宅元（六八四）年、徐敬業が則天武后討伐の兵を挙げると、その幕僚となり、武后を指弾する檄文を書いたが、この文を読んだ武后は、『宰相安クンゾ此ノ人ヲ失フヲ得ン』と、言つて、その才を惜しんだというエピソードは有名である。

徐敬業が破れると、賓王は行方知れずになつたといわれるが、殺されたという説もある。

以上のことから、一人の壯士として死んでいった荊軻の悲壮な行為は、唐・武后の時代に身を置く、駱賓王にとっては、身近なものとして意識されていたと思われる。権力者武后を倒して唐の李王朝を回復したいと願つた行動派の詩人である。賓王にとって、現実の易水での友人との離別は、戦国時代の俠気な荊軻の離別につながつていた感がある。

とくに、「今日水猶ホ寒シ」には、眼前の荒涼たる河北の風土に触発されながら、駱賓王は自己の慷慨を古人の行為のうちに見出し出していたにちがいない。単に荊軻の暗殺への旅立ちを偲んで悲憤慷慨の情にたえないと、いうだけではなくて、その悲歌も、そして、その気概も、現在なお、われわれも受け継ぐと見なし、一緒に国事に奔走しようではないかと、いう心情であつて、同志との悲痛な離別の情が、婉曲的に表出されていると見るべきである。

これは、古人の遺風（荊軻の俠気）と一体化している悲歌士駱賓王の真骨頂を暗示したものといえよう。

そわれるばかりで、思わず涙がこぼれるのである。六朝詩を脱却して、唐代独自の詩の先駆けとなったといわれるが、たしかに骨太な、ますらおぶりの作風である。

余談かもしれないが、陳子昂は、戦後、故郷（四川省・梓州射洪県）に帰るが、県令に財産をねらわれ、捕らえられて獄中で死んだと、いうが、これまた、あわれをさそう悲歌士の生涯を彷彿とさせるものがある。

はたまた、悲歌士の極致を歌いあげた、初唐・駱賓王（六四〇？―六八四）の五言絶句『易水送別』も、典故の持つ力を發揮した名作であるが、それはこうである。

此地別燕丹

此ノ地燕丹二別ル

壯士髮衝冠

壯士 髮 冠ヲ衝ク

昔時人已沒

昔時 人 已ニ沒シ

今日水猶寒

今日 水猶ホ寒シ

この詩は、駱賓王が易水のほとりて人を送った時のものである。易水（河北省易県を源とする川）で人を送るとなると、おのずと想起されるのが、戦国末期の荆軻の故事である。

食客として燕にいた荆軻は、太子丹の依頼を受けて秦王の暗殺にでかけることになった。荆軻を送るに際し、丹をはじめ、食客の面々は、白装束で送ったという。というのは、暗殺が成功しても失敗しても恐らく生きてはもどれまい、とする思いが、皆の心にあつたからであろう。やがて高漸離が筑（琴に似た楽器）を奏すると、荆軻がそれに和して歌い、その悲愴なメロディーに皆涙を流した。――荆軻は歩きながらまた歌った。

風蕭々トシテ易水寒ク

壯士一タビ去ツテ復タ還ラズ

慷慨して繰り返すと、人々はみな目を瞋らし、頭髮はことごとく逆立ち冠をつきあげんばかりであった。かくて、

きない様式といえよう。

畢竟、時間と空間のただ中に、一人立ち尽くして、あふれる涙を払おうともしない詩人の姿を彷彿とさせるものがある。

『陳氏別伝』や『資治通鑑』二〇六には、この詩の創作動機を、次のように記している。

陳子昂は降格されて、深い失望と屈辱のなかで、ある日、薊北楼（幽州台）にのぼって、この詩を作ったという。「因リテ薊北楼ニ登リ、昔ノ樂生（樂毅）・燕昭（燕の昭王）ノ事ニ感ジ、詩数首ヲ賦ス。乃チ泫然トシテ涕ヲ流シテ歌ヒテ曰ク」と、してこの詩の本文を引き、「時人知ラザル莫キナリ」（当時の人は、この経緯をよく知っていた）と、している。いうまでもなく、「昔ノ樂生・燕昭ノ事」とは、第一章で詳述した『史記』燕召公世家第四や樂毅列伝第二十のそれである。

盧藏用の『陳氏別伝』によると、本篇は、現実の世では真に己を知ってくれる明君にめぐりあえない苦悶、つまり、自己の献策の正しさに対する信念と自己の才能に対する自負心が、頑迷な武攸宜によつて無残にも一蹴されたことへの悲憤の情とともに、有名な故事（燕の昭王と樂毅の信頼関係）への思いが、詩人の胸中に去来したものだという。

だとすれば、ここでの「古人」、「来者」は、ともに賢者を重用する明君を暗示するものであろう。

さらに、「古人」には、昔の明君・賢者の意が感じられるが、より具体的には、ここ幽州（燕の地）の地が生んだ燕の昭王・郭隗・樂毅・鄒衍などがふくまれていよう。

過去、未来の明君・賢者に対する詩人子昂の追慕の情の深さに比すべき人が、現実にはいないことへの嘆きと、天地は永遠に変わらぬ微動だにしない様相との鮮烈な対比を感動の中核にすえている。だから、「独リ愴然トシテ、涕下ル」と、なる。つまり、孤独で悲しみにうちひしがれて、感情は悲憤、失意によつて、高揚し、悲しみに、お

ままならぬ君臣関係は、いつの時代にもあつたらう。とはいふものの明君昭王が後世の悲歌士によつて、時にとつて思い出され、僥しのばれたことが、逆に「燕趙悲歌士」の実像・虚像をふくらませ、詩文の世界で、はなやかないろどりの絵模様を展開させることになつていったのではなからうか。

時に、武則天（六二三―七〇五）一族の武攸宜は、將軍でありながら、戦略にくらかつた。前述したように唐軍は契丹に大敗して、軍中みなおののき、戦意をなくしていた。だから味方の不利な戦況を打開するために献策したが、しりぞけられ、しかも、反感をかつて、降格された。

この時のことを、『四部叢刊』所収の盧藏用の『陳氏別伝』には、「子昂からだよわ体弱しつ疾多シ。忠義ニ感激シ、常ニ身ヲ奮ふるヒテ以テこくし国士ニ答ヘント欲ス」と、ある。つまり、病気がちな、わが身をかえりみず、国士としての待遇に答えて、国家の恩義に報いようとの悲壮な志に基づく行為であつたのだ。

したがつて、濟世さいせいの才をいまだきながらも、その抱負を實現し得えず、前出の「薊丘けいきやうらんこ覽古」の連作を賦ふしたのち、感あきわまつて、雜言詩「登幽州臺歌」（幽州ノ台ニ登ル歌）を、さらに賦ふすにいたつたのであろう。

前不見古人 前二古人ヲ見ズ

後不見來者 後二來者見ズ

念天地之悠悠 天地ノ悠悠タルヲ念おもヒ

獨愴然而涕下 ひとり愴然そうぜんトシテ涕下なみだくだル

これまた、慷慨こうがいの歌であるが、五言二句、六言二句という異常な形式を取っている点、感慨の激しきは、より深いものが感ぜられる。

緊迫・凝縮的な五言の二句から、拡散的な六言二句への転移は、そのまま作者の感情の率直な表出であろう。六言二句は、むしろ散文的スタイルであるといったほうが妥当であつて、それは感慨の気の深さをおさえることので

南登碣石坂(註5)

南ノカタ碣石坂ニ登リ

遥望黄金臺(註6)

遥カニ黄金台ヲ望ム

丘陵盡喬木

丘陵 尽ク喬木

昭王安在哉(註7)

昭王安クニ在リヤ

霸圖悵已矣

霸圖悵トシテ已ヌルカナ

驅馬復歸來

馬ヲ驅ツテ復タ歸リ来ル

この詩は、七首連作の第二首目にあたるもので、「燕の昭王」というサブタイトルがついている。そして連作のはじめには、「丁酉ノ歳、吾北征ス。薊門ヨリ出デ、燕ノ旧都ヲ歴観スルニ、其ノ城池霸業、跡已ニ蕪没セリ。乃チ慨然トシテ仰歎シ、昔ノ楽生(楽毅)、鄒子(鄒衍)、郡賢ノ遊ノ盛ナルヲ憶フ。因リテ薊丘ニ登リテ、七詩ヲ作り以テ之ヲ志シ、終南ノ廬居士ニ寄ス」と、いう序があつて、この詩の創作意図が示されている。

したがつて、詩は、陳子昂が武攸宜の作戦参謀として契丹討伐に参加した時のものであることがわかる。「丁酉」は、武則天の神功元(六九七)年、子昂は、不利な戦況を好転させるために、短期決戦を申し出て、その先がけを自分に命じてくれるように建言したが採用されなかつた。そして、かえつて参謀から属官に降格された。

そこで失意のうちに、古の燕の旧跡を見てまわり、それにつけて、賢臣を厚遇したといわれる昭王を偲ぶわけであるが、今ではかつての黄金台の跡もなく、慷慨の心は、うらはらに自己の不遇な現況もてつだつて、いや増すばかり、まるで昭王に救いを求めるように、こみあげる感情のままに、「昭王安クニ在リヤ」と、絶叫する。思えば、昭王の時代より約一千年の月日が流れているのに、子昂は戦国時代の「燕趙悲歌士」の境遇を身をもって体得したわけである。

放心したように、「馬ヲ驅ツテ復タ歸リ来ル」と、いう筆致には、臨場感あふれるものがある。

この名句が、この時代の悲歌士の動的な行為の一面を象徴しているのではあるまいか。

この暗殺行では、田光・樊於期・高漸離といった志士までが、次々と悲壮な破局を、とどめることになる。

してみると、戦国時代の多くの志士が、悲運に終るなかで、見事に生きぬいて、人々の賞揚の的となった楽毅という存在は、どう評価すべきであろうか。

趙についても、中興の祖といわれ、胡服騎射で有名な武靈王や平原君・虞卿・廉頗など、人材にことかかない。かれらは一時は趙を隆盛にした逸材でありながら、これまた、いずれも悲運な破局をとどめていて、まさに悲歌士そのものである。

悲歌士といえば、同時代楚の屈原などは、その最たるものと思われるが、これはまた、別格扱いになるのである。うか。——とにかく、弱肉強食という時代の趨勢の中で、七雄といわれた国には、いずれも、後世に名をはせた悲歌士はいる。それなのに、何故「燕趙悲歌士」と、いうローカルカラーを浮き彫りにした俚言を生み出したのであろうか。

ただ、北京地方が幽州といわれた唐代（六一八―九〇七）に、「燕趙悲歌士」の概念が、詩文によって具象化されていったと考えられる。この点について、次の第二章で、著名な詩文を素材にして、論述したいと思っている。

二、

燕の昭王の賢者招致による治国策は、後世の人々（士大夫）を感動させ、崇拜させるにたる故事であった。

初唐・陳子昂（六五六―六九八。一説に六六一―七〇二）の五言古詩、『薊丘覽古贈盧居士藏用』（薊丘覽古、盧居士藏用二贈ル）は、そのティピカル（模範的）なものと思われる。それは、こうである。

では、楽毅が昭王に信頼され、恵王には忌避された所以はどこにあったか。

まず、昭王に信頼されたのは、楽毅の説く斉攻略法など、客観性があり、斉の現況をよく分析し、認識したうえでの献策で、蓋然性を有するものであったがためであろう。

そのうえ、よそ者の楽毅には、認められたことに対する感謝の気持と、謙虚さをもちつづけたからであろう。したがって、この返書に一貫しているライトモチーフは、昭王への熱い思いである。これが、人々を感涙にむせばせるものであるが、故なきことではない。

一方、恵王から忌避されたのは、恵王側近の中傷で、それもよそ者の栄達に対する嫉妬が主因であろう。

例えば、亜卿という重臣に任せられたり、諸侯にとりたてられたとき、ただ王のご命令を忠実に実行することを責務と考え、辞退もしなかったとあるが、ここには昭王と自分とのかかわりに対する考慮はあるが、それによって動揺と嫉妬をきたす同役・側近に対する配慮がない。

確かに、恵王やその側近に対する気配りとなると容易でなからう。とにかく、その点が意外にドライであったのが、田単の反間の計によって、楽毅にとっては裏目に出たものであろう。

だとしても、恵王が、自分（楽毅）をいとも簡単にすて去ったことに対する怨みの感情はあつたはずだが、書面には微塵も感じられないところが、これまた、人々の心を魅了するところであろう。

畢竟するに、「燕趙悲歌士」と、いうことばをとどめているほど、戦国時代の燕・趙の地には、憂国の志士が多く、時事に感じて悲歌慷慨したというが、さしずめその究極を明示するものが、燕の太子丹（燕王喜の息子）の命を受けて、秦の始皇帝の暗殺に出向く時、易水のほとりで、荆軻が悲壯にうたったという

風蕭々トシテ易水寒シ

壮士ヒトタビ去ツテ、マタ還ラズ

かたや、子胥は二人の君主の器量が、同じでないことを察知することが出来なかつたので、長江に投げ入れられるようになって、自説を改めなかつたと、いう把握であるが、これは、透徹した論理というか、相對評価の極致といえよう。

(二) 次に、樂毅は、「わたくしの何よりの願いは、罪に落ちることなくして功績を立て、先王のご威光を輝かすことであり、故のない誹謗を受けて、先王の名を辱めることなど、到底忍び得ないことである」と、いうが、これは、無実の弁明をするのではなく、認めてもらった先王の名を辱めることなど忍び得ないという現実の境遇にいたったことに対する自省と、先王への申し訳けない気持の吐露がにじみ出ている、人々の琴線にふれる効果は抜群である。

(三) また、「嫌疑をかけられた身として、それを口実に燕を討ち、利を得ようなんて、義としてなし得ぬところであります」と、いう。——冷静な判断による正義の生き方の伝達が、そこにはある。

五覇の春秋時代には、まだ仁義の世界が、見られたが、戦国時代には、それも影をひそめたといわれるのが、一般である。だとすれば、この義としてなし得ぬという訴えは、剷通や主父偃のみでなく、樂毅の境遇に近い体験をしたものにとっては、身につまされる感動的なことばであったにちがいない。

(四) はたまた、三国時代、蜀の諸葛孔明が、後主劉禪に奉った『出師の表』で、先帝劉備から受けた格別の恩顧を追慕しているところが、人々の琴線にふれて涙なしには読めないという風潮を生みだしているが、この『出師の表』のお手本になつたのが、この樂毅の返書であろうといわれるのも、これまた周知の事実で、頷ける。

(五) 結局、樂毅は、昭王と恵王の能力の差を適確に見きわめ、自己の身の処し方に対しては、生きながらえることを信条としていた感がある。

したがって、將軍の交替による呼びもどしに対しては、冷静な判断によって、趙へ亡命するという転身も、ためらうことなくできたのだと思われる。

滅ぼした。

これまた、燕の恵王が騎劫を楽毅と交替させたので、楽毅は趙に亡命したのと、軌を一にするもので、まさに「因果はめぐる小車」と、しかいいようがない。人間関係の複雑なからみ合いは、予測すべからざるものがあると、いえばそれまでであるが、この同じパターンの繰り返しだが、趙滅亡のきっかけとなり、燕よりも早く秦に滅ぼされることになった。

以上、ながながと戦国時代の燕の栄枯盛衰の様相を、『戦国策』燕策上・下と、『史記』燕召公世家第四・楽毅列伝第二十を参照して紹介したわけであるが、楽毅列伝では、そのエピソードに、楽毅の子孫のことまでふれていてユニークであるが、それは、こうである。

「趙が滅んで二十余年、漢の高祖（劉邦）が趙の故地に立ち寄った折、『楽毅には子孫はあるのか』と、たずねると、『楽叔という者がおります』と、いう答えだった。そこで高祖はこれを楽郷（河北省）に封じ、華成君とよんだ。華成君は楽毅の孫である。そのほか一族では、楽瑕公がいたが、趙が秦に滅ぼされようとしたところ、斉の高密（山東省）に亡命した。楽巨公はよく黄帝・老子の学を修め、斉で有名になり、すぐれた師と言われた」と。

それは、楽毅ゆずりの、生き方の達人の感を彷彿とさせるものである。

総体的に、戦国時代は、国内の君臣関係の如何によって、その盛衰の推移も決定づけられたといえよう。

さて、楽毅の返書で判断するに、楽毅が生きながらえたのは、冷徹な目で現実を見すえて、決して情に流されて可否を見あやまることはなかったということであろう。——それを立証するものを整理すると、

(一) まず、伍子胥と呉王闔閭と、その子の夫差とのかかわりに対する楽毅の分析が、それである。

呉王夫差は、伍子胥が進言した先王（闔閭）の政策を踏襲すれば、成功するのを悟らなかつたので、子胥を長江に沈めて悔いず、滅びの道に、わけいったという。

待した。商容も、その意見を入れられず、身を辱しめられたが、それでも紂王が改心することを願った。そして、政治がさらに乱れて、民心が離反し、囚人が勝手に牢獄から逃亡するようになって、はじめて、二人は退隱した。だから、紂王は暴虐な夏の桀王と同類とみなされるのだが、二人（箕子・商容）が忠聖の名をうしなわないのは、何故かと言えば、国を憂える誠をつくしたからである。ところで、わしは、愚かではあるが、紂王ほどに暴虐ではなく、燕の民は乱れてはいるが、殷の民ほどひどくはない。一家の中に不和があるのに、誠意をつくして和そうともせずに、家の中の内訌を、隣家に告げるようなことをするのは、何たることか。

そなたが、わしをかさねて諫めもせず、また、隣国の趙に出奔するというこの二つの事は、そなたにとってよいことではあるまい」と。

とにかく、身がつてもいいところで、譴責もここまでくると、お見事といわざるを得ない。紂王と箕子や商容とのかかわりを、自分と楽間との間柄にあてはめる論法、これは常套手段であったかもしれないが、噴飯ものの典型であろう。

蓋し、この書面は、以前恵王が楽毅に与えたものと、主旨が全く同じである。この燕王喜の繰り返しの不埒さは、何に由来するものであろうか。ここに燕趙悲歌士を産みだす要因があると、同時に、国家衰亡の必然性が感じられ、さらには、如何ともしがたい人間が業をさらすといった因果の念まで想起されて仕方がない。

結局、楽間・楽乗は、燕が自分たちの計をききいれなかったことを怨んで、二人とも趙に留まった。趙は楽乗を封じて武襄君とした。

燕が趙と講和してから、五年後（前二四四年）に、趙の孝成王が死んだ。悼襄王は、楽乗を廉頗にかえて將軍とした。そのため廉頗は楽乗を攻めた。楽乗は敗走し、廉頗も魏へ亡命した。その十六年後、前二二八年、秦が趙を

あつたらう。

だがしかし、燕は所詮、楽毅父子を用いることはできなかつた。またしても、前轍を踏むことになつたのである。それがひいては、国を滅亡へと誘うことになつていった。

その過ちとは、燕王喜（在位・前二五四年―前二二二年）の時、王は楽間の諫めに耳をかさず、趙に出兵して大敗を喫した。楽間は趙に亡命した。後悔した王は、手紙を送つて復帰を求めたが、楽間は拒否して趙にとどまつた。愚かなことに、同じ過ちが、またしても繰り返されたのである。

とにかく、前二二二年、秦の始皇帝の軍団によつて、燕はこの喜王をもつて滅亡した。

戦国分裂の時代を統一した秦国より一番僻遠の地にありながら、他の六国の中では、最後から二番目であつたが、燕は愚かな君主によつて、滅ぶべくして滅んだといえよう。

楽間が趙に亡命した経緯について述べると、こうである。

「楽間は燕にあること三十余年になつていた。燕王の喜が宰相栗腹の計を採用して、趙を攻めようとしたとき、楽間に、その可否を問うた。楽間は、『趙は四方の敵と、しばしば戦つた国です。民は戦になれていますから、それを伐つのは得策ではありませんせぬ』と、言った。

ところが、燕王はききいれず、趙を伐つたが、趙は廉頗將軍に命じてこれを迎撃させた。廉頗は、栗腹の軍を鄙（河北省）で大いに破り、栗腹と楽乗をとりこにした。楽乗は楽間の一族である。それを知ると、楽間は趙に出奔した。趙はついに燕都を包囲したので、燕は地を割いて趙と講和した。趙軍は包囲を解いて去つた。

燕王喜は楽間の意見を用いなかつたことを後悔したが、楽間は、すでに趙に出奔していたので、書面をおくつて訴えた。それはこうである。

「殷の紂王のときに、箕子は意見を用いられなかつたが、なおも諫めて怠ららず、いつかは聞き入れられることを期

しかしながら、夫差は、子胥を認めず、死を命じてその屍を馬の皮袋に包み、長江に流しました。

つまり、夫差は先王の方針の正しさを悟らず、あたら忠臣を川に沈めて悔いなかったので。また、子胥の方は、二人の君主の器量が同じでないことに早く気づかなかつたがためにみすみす死を招いたのです。

ところで、わたくしの何よりの願いは、罪に落ちることなく功績を立て、先王のご威光を輝かすことにあり、故のない誹謗を受けて先王の名を辱めることなど、とうてい忍び得ません。すでに思いもよらぬ嫌疑をかけられた身として、それを口実に燕を討ち利を得ようとするのは、義として到底なし得ぬところでもあります。

聞くところによれば、『真の君子は友と絶交しても、相手の悪口は言わず、忠臣は国を捨てても、わが身の潔白を弁解しない』と、申します。

わたくしは不肖ではありますが、先王の教えを絶えず胸に抱いております者、どうかご安心くださいますように」と。

以上、随分、長い返書であるが、楽毅一流の理解しやすいロジックの名文である。

恵王は、楽毅の返書を一読するや安堵し、楽毅の子の楽間に昌国君の位を継がせた。その後、楽毅もふたたび燕と往き来するようになって、燕・趙両国から客卿（政治顧問）の待遇を受け、やがて趙で生涯を終えた。

このように楽毅は、恵王に忌避され退けられながらも、先君昭王の恩恵に浴したことで、燕への義を守りつづけたのである。

司馬遷は、『史記』楽毅列伝第二十の最後に、——『かつて、斉の蒯通と主父偃は、楽毅の燕王（恵王）への返書を読むたびに、書を閉じて泣かないことはなかったという』と、記載している。

漢代初期の策士として著名な蒯通や主父偃としては、自分達の境遇に比べて、楽毅の身の処し方、先王（昭王）への一途な忠節など、時宜を得たもので、尋常な生を全うしたことに對する賛嘆と羨望とがないまぜになった涙で

先王はそれをもつともだと思われ、符節を持たせて、わたくしを使者として、趙にお出しになりました。

わたくしは、帰国して報告をすませてから、兵を起こして斉を撃ったのです。——天運のめぐりあわせと、先王のご威光のおかげで、黄河の北方一帯の地が先王に服従しましたので、その地の兵を済水のほとりに集め、燕軍に加えました。

その済水のほとりの軍は、命を受けて斉を撃ち、大いに斉軍を破り、さらに精銳軍が長駆して斉の都に迫りましたので、斉王は莒に逃走し、一命だけは、やっと助かったのです。

斉の珠玉・財宝・戦車・武器・珍器は、ことごとく燕のものとなりました。それら斉からの戦利品は寧台に陳列され、大呂（鐘の名）は元英に展示され、斉に持ち去られていた鼎も磨室にもどり、薊丘（燕の都）には、斉の汶水のほとりの竹林が移植されました。そのかみの五霸このかた、功業の点で先王に及ぶものはありません。

先王はご満足なさいまして、地を割いてわたくしを封じ、小諸侯と比肩しうる身分にしてくださいました。これまた、お言葉どおりにいたしても、罪を受けることはあるまいと思ひ、お受けして、ご辞退申しませんでした。

わたくしは、『すぐれた君主は、なしとげた功業を台無しにしてしまうことがない。ゆえに歴史に名を輝かす。一方、明察の士は、かち得た榮譽をそこなうことがない。それゆえに後世まで名が残る』と、聞いております。

先王は積年の恨みを晴らし、恥をすすぐために、強国斉を征伐して、八百年にわたって蓄積された財宝を押収されました。そこで崩御の後も、生前の教命は衰えず、重臣は法令を遵守して遂行し、嫡と庶の分を乱すことなく、そのご遺徳は庶民奴僕にまで及びました。この功績は、すべて後世の範とするに足るものです。

きくところによりますと、『始めをよくする者、かならずしも終わりをよくせず』と、申しますが、昔、伍子胥（春秋時代の楚人。名は員、字は子胥）の意見が呉王闔閭（前五一一―前四九六在位）にききいれられたがために、闔閭の足跡は遠く楚都の郢にまで及びました。

した。

いまあなたは使者を遣わして、わたくしの出奔の罪をお責めになりますが、わたくしは、あなたのお側にいる人々が、先王が、何故にわたくしをご寵愛になったか、その理由を察せず、また、わたくしが先王におつかえした心情をも明らかにはされまいと考えますゆえに、はばかりながら書面をもつて、お答えいたします。

わたくしは、『すぐれた君主は、臣下を用いるのに私情をさしはさまなくて、その実績によって功を評価し、能力に応じて官職を与える』と、聞いております。

つまり、才能を認めて臣下を登用する者は、君主としての大業を成就し、その君主の人徳を知って仕える者が、名臣と呼ばれるわけでありましょう。

わたくしが、ひそかに先王の御振舞を観察しますに、世上の君主より一段と高尚な心を持っておられました。だから、わたくしは魏から燕に先王をしたってやってきたのです。——すると、先王は、わたくしのような者を過大に評価され、賓客に加えて群臣の上に置かれたばかりか、ご一門の方々にも諮らず、亜卿（上卿につぐ重臣）に取り立てていただきました。わたくしは身の程をも顧みず、ただ王のご命令を忠実に実行することを責務と考え、あえてご辞退申しませんでした。

先王は、『わしは、斉に積る怨みと、深い怒りを抱いている。だから燕の国力が微弱であるのも考えずに、ただもう斉を伐ちたいのだ』と、おおせられましたので、わたくしは、『そもそも、斉には、桓公が覇をとなえた余光があり、しばしば戦勝した実績があり、武器をそなえ、戦いに習熟しております。したがって、斉を伐とうとおのぞみでしたら、是非とも天下の諸侯と力を合わせねばなりません。それにはまず、趙と同盟なさるのが、一番であります。さらに、淮水の北の宋の地は楚・魏がほしがっているところです。趙がもし承諾し、四国（趙・楚・魏・韓）と盟約してお攻めになれば、斉を大敗させることもできましょう』と、申しました。

追いはらい、ことごとく斉の城邑を回復した。

燕の恵王は、騎劫を楽毅と交替させたがために、軍は敗北し、將軍を亡うしない、斉の土地をうしなつたことを悔くいたものの、一方では、楽毅が趙に亡命したことを憎にくく思い、さらに、趙が楽毅を用いて、燕を伐つのではないかと恐れて、人をやって楽毅にわび言ごと、逆に責せめ、とがめることばを伝えさせた。

「先王（昭王）は、わが国の命運を將軍に委ゆたねられ、將軍は燕のために斉を破り、先王の仇あだを討うち、国威を天下にとどろかせてくれた。わたしは、一日として、將軍のこの功を忘れたことがあろうか。騎劫を將軍と交替させたのは、先王の崩御にあい、わたしは、即位したばかりで、側近の者のさしがねによるものだった。

わたしは、將軍が久しく外地で苦勞を重ねていることを思い、呼び返して、しばらく休養させ、改めて事をはかろうと考えたにすぎない。それを將軍は、わたしと不仲のゆえと誤解して、ついに燕を見捨みすてて趙に身を寄せてしまわれた。なるほど、將軍みずからの身にとっては、それでよいであろうが、それでは、先王が將軍を厚遇した志には、どのように報いてくれるのか」と。

一見、啞然あぜんたる感をまぬがれぬ。それにしても恵王のいう、「側近の者のさしがね」だの、「將軍は誤解して」、あるいは「先王の厚遇に報いてくれぬ」など、いずれも自分の責任を転嫁したもののばかりで、リーダーとしての自覚は皆無かいむもいいところである。

普通、人間の器量は、失敗したときの身の処し方を見ればよくわかるというが、偉大な昭王の後継者が、暗愚な王とは、これも戦国時代という混沌、分裂の人の世ゆえに生みだされた親に似ない鬼子おにごの一例であろうか。

さて、楽毅は、先王（昭王）への熱あつい思いと、現在の心境などをつづつた以下のような返書を恵王に送った。

「わたくしは、愚か者ながら、王命うけたまわを承りながらも、王のお側そばの人の心に順したがうことはできません。それは、先王の聡明さを傷つけ、あなた様のご高義をそこなうことではないかと、恐れたからです。だから逃げて趙に出奔しま

王自身は、死者を弔慰し、孤児を慰問し、百官民衆と苦楽をともにした。

昭王の二十八年、精進のかいあって、燕国は殷賑をきわめ、士卒は楽しんで、戦闘をいとわぬようになった。ついに昭王は、楽毅の助言をうけいれ、楽毅を上將軍とし、秦・楚・趙・韓・魏と連合して、悲願であった齊に進攻させた。

済水の西で、連合軍は齊の軍隊を打ち破った。齊王は、国外に出奔した。ところが、楽毅にひきいられた燕軍は単独で、敗走する齊軍を追って、齊都の臨淄城内になだれこみ、ことごとく宝物を略奪し、その宮室、宗廟を焼いた。楽毅は帰国せず、齊にあつて各地の討伐をつづけた。それは昭王の怨念をはらすものでもあった。したがって、齊の城市のうちで、降服しないのは、ただ、聊・莒・即墨のみであった。その他七十余城は、みな燕の勢力下にはいった。昭王は北方にも軍隊を派遣して領土を拡張した。しかも北方には、長城（防壁）を築いたが、それはいまの万里の長城よりも、深く北にくいこんでいたという。

北京北東の八達嶺や金山嶺の長城を見るにつけ、燕昭王の時代は、長城は無用の長物ではなく、北狄・山戎などの侵攻を実際に防ぐ防壁として、有効で必須のものであったことに思いをはせると、ひとしお感慨深い。

燕が強国になったのは、討伐した齊の施策に学んで、昭王が人材を尊重したからである。

齊が大勝して、六年たった昭王の三十三年、昭王は死去した。そして、その子の恵王が即位（前二七八年）した。恵王は太子であったところから、いつも楽毅をこころよく思っていたいなかった。齊の田单がこうした事情を聞き知ると、間者を燕におくりこんで、恵王と楽毅の離間工作を成功させた。

やがて、恵王は騎劫をかわりの將軍として派遣し、楽毅を召喚した。楽毅はこの交替が好意からではないと判断し、西行して趙に亡命した。趙は楽毅を觀津に封じ、望諸君と号し、優遇して、燕と齊への警告としたのであった。齊の田单は、騎劫と戦い、計略をもって燕の軍をあざむき、ついに即墨の城下で打ち破ったが、転戦してこれを

だがしかし、時は流れ、前三二〇年ごろ、燕は噲王かいおうの時、内訌・内乱が発生した。愚かな国王は、宰相の子し之しに国政をゆだね、自分はその臣下になって、これに仕つかえたのである。三年たつと国は大いに乱れ百官庶民は恐れおのいた。——ついに將軍の市被しひが太子の平と謀はかつて、子之を攻めたが勝たなかった。すると、市被は寝返り、百官とともに、逆に太子の平を攻めて戦死した。太子は市被の屍しかばねに刑罰を加えて、衆にみせしめにした。

この時、齊の諸將が齊王に、「この機に乗じて攻めこめば、必ず燕を破やぶることができます」と、すすめたので、その言を入れて、燕を攻めて大勝した。

齊の兵士が攻めこむと、燕の士卒しそつは戦わず、また、城門も閉鎖へいさしなかった。

この戦いで燕の噲王は死亡し、子之は亡命した。二年たつて、燕の国人は太子の平を立てた。これが、燕の昭王である。——齊の桓公が燕を助けたときから、すでに三百五十年たつていた。

愚かな噲王の出現が、内乱の起因とはいうものの、この悲劇は、燕・齊二国にこくの国風を推移させ、人間の美質を喪失させていたのである。

つまり、端的に言えば、正義や憐憫れんぎんなんて消失して、胴欲どうよくそのものの戦国時代の行動様式ていしきを呈ていしていたのである。一旦破滅いつたんしたのちに即位した燕の昭王は、なんとかして燕を復興させたかった。

そこで、師傅しふの郭隗かくかいを訪ね、人材を得たいがどうしたらよいかと、教こえを乞こうたのである。

すると、郭隗は、「王がどうしても、すぐれた人士を招まねこうとおのぞみなら、まず、隗わいを厚遇わうぐすることからはじめなさい。そうすれば、隗より賢明なものは、千里を遠しとせずまに参集さんじついたしましょう」と、言った。

これが、『戦国策』燕策・昭王の章に記載されている「今、王誠まこと二士しヲ致いたサント欲ほつセバ、『先まヅ隗かいヨリ始はじメヨ』」の名言で知られる、それである。

果たして、楽毅がっきが魏より、鄒衍そうえんが齊から、劇辛げきしんが趙から、まるで先さきを争まうようにして、やってきた。さらに、昭

賦という直叙の表現法で歌われている、三章、一章三句からなるが、この詩は、その第一章である。

召伯が村をめぐる、ある時、甘棠（やまなし）の下で、村人の訴訟をきいて、公正な裁判をしたのであろう。人々は、その徳を慕って、甘棠の木そのものを尊んで、まるで神木のように敬っている様子が、三章のリフレイン（くり返し）の詩によって、歌われている。

ところが、長男に治めさせている燕は、辺境ということもあつて、弱小国であつた。北方の山戎・貉という異民族が、すぎがあれば侵攻して、悩ました。燕は、かれらと戦わなければならず、そのうえ、東は齊、西は晋という大国と隣りあつていて、たえず戦戦恐恐たる境地に立たされていた。

司馬遷は、『史記』燕召公世家第四で、次のように述べている。

「召公奭は仁人というべきである。かれがその下で休んだ甘棠の樹でさえも、人民はなつかしんだ。まして召公その人に対してはなおおさらのことである。燕は北は蛮貉（北狄）と境を接し、中国に対しては、齊・晋と交錯し、強国にはさまれて不安定であり、もつとも弱小であつた。ほとんど滅亡しかけたことも、しばしばであつた。ところが、国家が存続すること、八・九百年、周と同姓の姫姓の国家のなかで、最後に滅びた。これは、召公の余光がしからしめたのではなからうか」と。

燕は召公より十七世にして、莊公にいたつた。莊公の十二年に、齊の桓公が覇者となつた。二十七年に、山戎が侵攻して燕を蹂躪したが、この時、齊の桓公は燕を救援し、北進して、山戎を根拠地まで攻めいって、打撃をあたえた。

その桓公が凱旋するのを見送つたさい、莊公は感激のあまり、越境して齊の国内までついていった。すると齊の桓公は、莊公が見送つた地点まで、燕の領土としてあたえた。「春秋の五霸」の筆頭といわれる桓公らしい寛容な対処法で、春秋時代の美談の一齣であろう。

時に、自分が天子の正統な継承者であることを誇示するためであった。また、父、文王の時から師事した太公望（呂尚）をはじめ、同族のものも各地に封じた。——具体的には、神農・黄帝・堯・舜・禹といった天子の子孫は、それぞれ、焦、祝、薊、陳、杞に、呂尚は齊に、同族のものは、それぞれ、魯・燕・管・蔡などに封じた。いづれも、中原の地であって、今の河南省周辺と山東省の一部であった。ただし堯の子孫が封じられたのは、北方辺境の薊、ここがいまの北京あたりと思われる。そして燕はそれよりやや南の河北省あたりである。

したがって、いまの北京は太古より北方僻遠の地であった。ところで、周王朝が樹立されたのは、紀元前一〇〇〇年ごろで、確実な年代は不明であるが、その周王朝も約三五〇年で滅び、都を鎬から東の洛邑に移して再建されたものの、すでに王朝の威力はなく、分裂の時代となっていた。——都が鎬（陝西省）の時代を、その位置から西周といい、東の洛邑の時代を東周という。その東周も名目のみであったが、約五〇〇年つづいた。

そして、その東周前半の約三七〇年を春秋時代といい、後半約二五〇年を戦国時代ともいう。

さて、燕に封ぜられたのは、武王の弟の召公であった。もともと召の地（陝西省岐山県）を治めていたので、召公といったが、名は奭、姓は姫である。召公は燕に封じられたものの自分は赴任しないで、長男をやって治めさせた。そして、次男に、召の地を継がせている。

周は武王が死ぬと、成王があとを継いだ。幼いので、武王の弟、周公（名は旦）とともに召公は、後見役をとめた。

孔子が崇拜してやまない周公同様、召公も為政者としてすぐれ、かれの死後、人民がその徳を讃え、なつかしんでうたった詩が、『詩経』召南の甘棠篇に見えるが、それは、「甘棠ハ召伯ヲ美スルナリ。召伯ノ教、南国ニ明ラカナリ」と、いう序のあとに、「蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇」（蔽芾タル甘棠ハ、剪ルコト勿レ、伐ルコト勿レ、召伯ノ茇リシ所）と、つづく。

燕趙悲歌士覚書

松崎 治之

A Note on Patriots of the Declining Countries, Yan and Zhao

Haruyuki MATSUZAKI

一、

燕趙とは、今の河北省の北部、及び山西省西部の地で、中国、戦国時代（紀元前四〇三―紀元前二二二年）の燕・趙二国の地で、古来悲歌慷慨の士（憂国の志士）が多いといわれている。

首都としての北京は、東北に偏りすぎている。歴代の都城が、鎬・咸陽・長安・洛陽・開封など、西よりとはいえ内陸に位置していたのを思う時、その感ひとしおである。

では、北京の都城としての史的経緯はどうかといえば、至元十六（一二七九）年、蒙古族の忽必烈（世祖）が南宋を滅し、中国を統一し、国号を『元』と称し、今の北京あたりに「大都」という名称で居をかまえたのにはじまる。以来、『明』・『清』・『中華民国』・『中華人民共和国』と、ほぼ、七二〇年間の都城である。

しかしながら、北京地方の歴史となると、太古にさかのぼる。史実を繙くと、「紀元前一〇〇〇年ごろ、周の武王は即位するや、自分より以前の天子の子孫を、由緒ある土地に封じた。それは、以前の天子に敬意をあらわすと同